

ゐるところだ。何か海にいゝ所でもないか。

龜 さうですかね。ソレは御不自由ですね。どうです向ふに見えますあの海の岸ですね。あの岸まで来ませんか。あそこにはソレはくゝハナイでもハハナツブルでも、林檎も蜜柑も、山ほどあつて、あなたの來るのを待つてゐますよ。

これを聞きましたお猿、もう食べたくつて仕方がありません。けれども海を渡ることが出来ません。

龜 ナアに心配することはありませんよ。私の背中にお乗りなさい。私が連れて行つてあげますよ。

猿 それは千萬辱ない。

と、どうですお猿の奴さん、ビヨコンと龜の背中に乗つて大得意。たツと龜公。岸の方ではなくサツサくゝと海の方へとつれて参ります。気が氣でないお猿、

猿 龜さんくゝ何處へ連れて行く。

龜 知れたこつた、海の真ん中さ。全體お前をつれて來たのは、お前の肝が欲しいからだ。海の中に果物なんぞあつてたまるものか。もう覺悟をするがいゝ。

と聞いてびつくりお猿さん。赤い顔をいよく眞赤にして、「あゝ情けない、これがこの世の別れか」と一時は悲しく思ひましたが、イヤこゝは一つ甘く龜公を嘘かしてやらうと。いとまことしやかに背中から龜公の顔をのぞき込みながら、

猿 イヤさうでしたか。ソレならさうと初めから云へばいゝに。出かける時、餘り急いだので、俺の肝は、つい木の枝にかけたまゝ忘れて來て終つた。折角のことだ。御苦労だが。もう一度陸までつれて行つておくれ。取つて來てあげるから。

かう聞きました龜公、がつかりして、「オヤゝゝそれでは肝はもつて居ないのか」と。又候、ノコゝと元の岸の所まで参りますと、急いで陸の上へビヨコンと飛び上り、スルスルツと山の木の枝に駆け登つたお猿、白い歯をむき出しながら龜に向つて、

猿 木を離れて果物なし。身を離れて肝なし。阿呆やア

と云つて何處かへ逃けて行きましたと申します。

これは本行經や雜寶藏經に出て居る有名なお話です。ある人はこれは龜ではなくて虵（龍のこと）だと云つて居ます。

(三) はかなしく

日蓮聖人は、この二つのお話をお引きになつて、一つは當時の人々が、皆、佛教徒だと云つて、ソレ／＼佛教を奉じて居りながら、その根本の本佛を忘れて、枝葉の佛や菩薩を本尊として歸依してゐるのは、どう云ふ譯か。全體、佛教と云へばお釋迦様の教へであり、お釋迦様が根本の本佛であることは、法華經の壽量品にチャンと決つたことだ。ソレを、イヤ樂師様だ阿彌陀様だ觀音様だと、アレだコレだと迷ふのは丁度天上の輪の月を忘れて、水中浮葉の影に思ひをこがす愚さではないかと、

華嚴經の臺上盧舍那、阿含經の丈六の小釋迦、方等、樂若、金光明經、阿彌陀經、大日經等

の權佛（かりの佛）等は、この壽量品の佛の天月の、しばらく影を大小のうつはものに浮べ給ふを、諸宗の智者、學匠等、近くは自宗にまどひ遠くは法華經の壽量品を知らず。水中の月に實月の思ひをなして、或は入つて取らんと思ひ、或は繩をつけて、つなぎとらんとす。これを天台大師釋して曰く、天月を識らずして、但、池月を觀ず。と、心は爾前（法華經以前の佛説）迹門（法華經中壽量品以前の佛説）に執着するものは、天の月を知らずして、但池の月を、のぞみ見るが如くなりと釋せられたり。（壽量品得意鈔縮遺六七〇頁尙開目鈔同七六四頁詳悉）と、この下、今の五百のお猿のことをお引きになつて居るのであります。

次に猿の肝のことは、

所詮、妙法蓮華經の五字をば、當時の人々は、名と許り思へり。さにては候はず、體なり。體とは心にて候。章安云く、蓋し序王とは、經の玄意を叙す、玄意は文心を述すと云々。この釋の心は、妙法蓮華經と申すは、文にあらず義にあらず、一經の心なりと釋されて候。されば題目を離れて法華經の心を尋ぬるものは、猿をはなれて肝をたづねし、はかなき龜なり。

山林をすて、果を大海の邊にもとめし猿猴なり。はかなしはかなし。(曾谷入道殿御返事箱遣一六五六頁)

この御文章に明瞭で御座います。

幸にも佛道に志し、佛果を求むる身の、同じく信を取らば、せめて聖人より「はかなしく」のお叱りを蒙らぬやう、自らも勵み、他にもお勸めいたし度いと存じます。

五 寓 話 五 則

(一) 指

ある仙術(ふしぎな術)を得て来た人、途上で、貧窮な友人にあひました。相變らず見すほらしい風姿をして居るので哀れに思ひ、自分の得て来た仙術をもつて早速、路傍の石ころを黄金

にして、その友人に與へました。

ところが、友人は「少い」と云ひますので、さらばとこんどは、うんと力を込めてお寺の門前にあつた大きな駒犬を、すつかりピカ／＼光る大層な黄金にしたのですから、友人は、どの位喜ぶだらうと思つてゐますと、一向嬉しさうな顔も致しません。仙術を得た人、少々ムツとして

「一體どうすればいゝのだ」

と訊きますと、友人のいはくには

「君のその指がほしいのだ」

と申しました。

お互、人間は、誰も彼もこの指がほしいのでせう。

(二) 好酒

酒ずきの人、ある時、日本一の銘酒を而も一升頂きました。折角のことですから爛をして飲まうと、徳利をドブんと湯につけた拍子に夢はさめました。その人、忌々しがつて

「え、こんなことなら、冷で飲めば宜かつた」と申しました。

わたし達は毎日々々こんな夢を見て、その日々々を送つてゐるのではないでせうか。

三 無言上人

ある山寺に四人の上人があつて、七日の間無言の行とて、一言も物を言はない修業を致しました。初めの日、おひくくと夜も更けるにつれて、佛前の灯火が、油が切れて消えようとする。すると下坐の一人、

「小僧、灯を捲きあげよ」

と云ふのを聞いた次の僧

「無言の場所にて、物を言うてはならぬではないかと注意した。」

三番目の和尚さん、頭に青筋立て、

「二人とも、さう物を云ふとは、氣ばし狂つたか」

と叱り飛ばしますと。最後の上座の老僧。こゝぞとばかり、

「ものを云はぬは、斯く申す、拙僧ばかりだ」

と、すましたものでした。

お互に頭の蠅に氣をつけませう。

四大晦日

大晦日の晩、乞食、夫婦づれにて橋の下に寝てゐますと、懸取りの往來、引きも切らず。女

房の乞食、夫に向ひて

「あの通り、懸金を夜通し駆け廻つて集めるのも、並大抵の苦勞ではなし、われ／＼は、その苦しみもなく、盆も大晦日も、宵からゆつくり斯うして寝られる。これを思へば乞食が、ホシに氣樂で御座います」

と云ふに、夫、一段と聲ふりあけ

「その樂は誰がさせる。みんな、俺がおかけと思へ」と威張りました。

進んで利他の大願を立て得ず、僅に利己の小成に甘んじて居る人々は、反省せねばなりません。まい。

五 頭

ある人、朝、フト目をさますと自分の頭がない。

「これはしたり何處へ紛失したらう」と机の抽出から、箒、長持、押入、さては臺所のすみすみまで捜しましたが、見つかりません。

「もしや隣家にでも轉がつて行つたのでは無からうか」

と隣家へ尋ねに行かうと、家を出かけに餘りにあはて、コツンと戸口の鴨居に頭をうちつけ

「アイタ……………」

と、額に手をやつて見て

「オ、矢つ張り、こゝに着いて居た」

と安心したさうです。

頭を忘れて居る人が、今の日本には大分多いと云ふ話。

六 何れが大事

それはお釋迦様が苦行林のある蒼鬱と繁れる園林の中の、とある樹蔭の下に、靜かに冥想に耽つて居られたある夜明方であつた。

あわたゞしい足おとがして、續いてドヤ／＼と斷けつけて來た人々約三十人、手ん手に獲物などを持つて事態容易ならぬ物ごし。ふとこゝにお釋迦様の居られるのを見ると、その中の長老らしい一人

長 尊者、こゝにかく／＼の婦人は參りませんでしたか。

佛 どんな婦人か。してこゝへどうしてその婦人は來たのか。

長老らしい男は簡短にその仔細を語つた。

この園林の中に三十人のものが、ある規約の下に、一團と成つて生活して居る。その中、二十九人までは悉く妻帯をして、中には可愛い子供までも設けたが、残る一人が思はしい婦人が

なく、たま／＼あつても帯に短くたすきに長く、中々氣に入らない。一同深く心配して、このごろ漸く一人の容貌よき娼婦があつたので、ソレを娶合せて妻とさせた。

この娼婦は物事のよく捌ける氣のきいた美しい婦人であつたので、その男の氣にも入つた。いよく昨夜がその結婚の披露だと言ふので、一同大に祝し大に飲み、三十人とも、ぐつすり寢込んで終つて、今朝の夜明方、ふと氣がつくと婦人が居ない。

「わしは時計がない」

「財布がない」

「オヤわたしも大事な指輪が有りません」

と、如何でせう、その男のものと云はず、三十人の金銀財寶悉く取纏めて持ち逃げをして終つたのです。

あいた口が塞がらない馬鹿々々しさ。一同早く後おつかけて取つちめてやらうと、たゞ今こゝこへやつて來たので御座います。

長 して私も其の中の一人で御座います、尊者よ。

佛 では汝等に問ふが、いま彼の婦人を求めるのと、汝自身を求めるのと、この二つのうちで、どちらが大事であるか。

長 はい……尊者よ、それは自分自身を求めることが大事だらうと存じます。

佛 ではまア坐るがよい、暫くお話をしよう。

一同のものも、つぎくにお釋迦様を取りまいて、朝の教化に預り、心もかろく身もすがすがしく、その場で直に出家して徒弟になつたと云ふ。(佛本行集經)

末法の教主日蓮聖人が、その直檀上野時光氏に示して「人を教訓せんよりは、我が身を教訓あるべし」(縮遺一五五頁)と言はれた事は蓋し千古の金言であります。

七牛王尊者

お釋迦様の十大弟子中、智慧第一の舍利弗尊者のお弟子に「憍梵波提」と云ふ方がある。譯して牛伺、牛相、牛跡、牛王とも申します。この方は法華經の會座には第一の聽聞衆として、二十一尊者の數に連り、「五百弟子品」に於ては、普明如來と申す成佛の豫證(記莖)までも頂いて居らるゝ堂々たる阿羅漢(聖者)様で在ッしやるにも拘らず、不思議なことには、「食後つねに虚哨を事とす」とて、御飯か何か召し上ると、あの牛がムシヤクと口を動かして、いつも涎を流してゐるやうに、この羅漢様も、いつでもムシヤクと口を動かし、嚼んでは喰べ、喰べては又出し、出しては又嚼み、年がら年中、ムシヤクとやつて居られた。ソレで牛伺(伺とは、口の中でねつてかむこと)その口の動かしがたが、いかにも牛に似て居るので「牛相」。ことに足の甲が牛そつくりなので「牛跡」と云ふのです。

斯やうに、いつもモググとやつて居るのを、人々がおかしがつて笑ふものですから、お釋迦

様は可愛相に思召し。

「お前はこの人間界に居て、人に笑はれるのもつらからう。笑つた人も罪を得る。一層のこと、あの天上界に行くがい。」

と、その日から初利天と申す高い、初利天の戸利沙樹と云ふ木の下において下さいました。さて、どうして此のやうに牛のまねをするのか。その胃袋が反芻動物的に出来上つて居るのかと申しますと、ソレは昔も昔ずうと大昔に、この人曾て坊さんになつて修行してゐた時、たま／＼農夫の作つてゐる田の側に参りました。

丁度、秋の收穫時でしたから、稲の穂は美事に實つて、フサ／＼と風に靡いて居た。

その時、この坊さん、フト一本の稲の穂を摘んだ拍子にボロ／＼と穂の米が地面にこぼれた。よくあることです。要もないのに、田の側など通りがけに、チヨイと穂をつまむ。一粒口の中に入れて見るが、左程おいしいものでない。

「なアんだこんなものか」

と路傍に捨て、終ふ。ソレをやつたのです。

ところが米は人の命をつなぐ大切なもの、吾々の口の中に入るまでに八十八度も手数がかゝると云ふ。尊稱して「菩薩」とまで稱へる。

日蓮聖人も

「食には三の徳あり。一には命をつぎ、二には色を増し、三には力を添ふ。」(食物三徳御書縮

續一二三頁)

と仰せ、特に「民の骨を碎ける白米」(縮一七二五頁)とまで稱へられて居る。その米を僅かではあるが無益に捨てたのだから報いは實に恐ろしい。死ぬとすぐ牛に生れ變つて重いものをついだり、遠い道を歩いたり。ソレも一生や二生ではなく、五百生の間、生れ變り死に變り牛になつて、稻をすてた償ひをした。けれどももとが坊さんだつたから牛の中でもいつも牛の王さんになつたが、それでも

「モウ／＼牛は懲り／＼だ」

と、やつと罪滅ほしも済んで、こんど嬉しくも人間に生れ來り、同じく坊さんになつたのです
が、前生の牛の習慣がおのづから残り、相も變らずモグ／＼口を動かすのだと云ふ。

「牛王尊者」とはこの前生に牛の王だつたからの名です。

この人、天上界に於て、お釋迦様の亡くなられたのを聞き、自分もその後を追つたのですが、
會てまたある時は、あの鳥の中の雁に生れたことがあり、五百羽のものと共に住んでゐたので
すが、いつも美しい花果があると、ソレを健氣にも雁王にお供へすることを怠らなかつたので、
かくも天上にあり、天上から立派な供養まで受けたのだと傳へます。

この話は、一には因果の歴然たること。二には小さいことでも、輕んじてはならないと云ふ
こと。三にはソレが習慣となると最早牢固として抜くことの出来ぬものになると云ふこと。こ
の三つの事を適切に教へられたものと思ひます。

私達はやくもすれば、角ふり立てゝ怒り狂はんとする心がある。その心を調御して、傍目も
ふらずカツと智惠の眼を見開き、一歩々々と堅實に大地を踏み占め、やがては目的地に達する

あの力づよい牛の歩みを學びたいものです。

怠らず行かば千里のほかも見む、牛の歩みのよし遅くとも……。

八 はんどく尊者

お釋迦様が、印度舍衛國の有名なあの祇園精舎と申すお寺に居られたとき、五百人と云ふ澤
山の人々が一時にお弟子になつたことがあります。

その五百人の中に、一人の婆羅門(貴族)の息子があつた。室羅伐城に住んでゐたが、両親と
も亡くなつた哀れな身の上。深く世の無常を悟り、家業は弟に譲つて日夜世尊につかへての勤
行精進。元より才學衆にすぐれ、修業の效もかひなく、直に羅漢(聖者)の列に加はつた。
その名を摩訶槃特と云ふ。この人の弟に須利槃特と云ふ人があります。普通略して「槃特」と

呼んで居りますが、この人、また兄の出家を慕うて自分もお釋迦様の弟子となり、沙門の數に加はりたいと願ひ出ました。

ところが、この弟は、兄に比べると月と鼈ほどのちがひ、愚鈍も愚鈍、自分の名前さへも覚え切らぬ。やむなく大きな紙片に

「わたくしはすりはんどくとまをします」

と脊中にベッタリ貼つて歩いたと云ふ。でも頭を剃り袈裟をつけたのですから、兄がお釋迦様に代つて

「身語意業に悪を造らざれ

世間の諸の有情を惱まさざれ

正念に欲境の空なることを觀知し

無益の苦は當に遠離すべし」

「からだにも口にも心にも、悪いことをせず、世のすべてのひとくをなぐさめ。おもひを正

しうして慾を去り。無益の苦に捉へらるゝな」

と、ホんに佛法の初門と申しまするか、先づ「いろは」を習はせた。

が、どうしてこの一偈の二十八字が、さう容易く天下一の愚鈍ものに覚えられよう。一月かゝつても二月三月四月もかゝつて、なほ、初めの句を覺えると次の句を忘れ、次の句を覺えるともう初めはダメ。そのうちお寺の前を通る牧牛者が覺えて終つた。榮特しかたがない、兄の居ない時はとき／＼この牧牛者の處へ教はりにゆくと云ふ仕宜。兄もほと／＼くやしいやら悲しいやら、

「おまへのやうな怠けもので、おきても守れぬ不届もの、とても一人前の僧侶になれるものか。こゝに居つても却つてこの兄も恥しい、お釋迦様にも相濟まぬ。とつと出て行つて還俗でもするがいゝ」

散々叱りつけ袈裟ころもをはぎ取つてお寺を追ひ出しました。

門の外に立つた榮特、淋しさうに兄の居るお寺の方をふり返つて見てゐましたが、

「あゝ折角父母の菩提を弔ふため、兄と一緒に僧侶にならうと思つてこゝに來たのに、こんな悲しいことがまたと世にあらうか。家にかへつたとて両親も在さず、せめて一人の兄とたよつてもたよられず……」

たゞサメムと泣くばかりでした。

ところへ宛もよし靜かに經行して居られたお釋迦様、他から二三のお弟子をしたがへておかへりになり。門にお入り遊ばさうとして御覽なされると今の有様。

「よし／＼今日からはもう戒も守らんでも宜い、お經もよむに及ばぬ。いゝかその代り毎日毎日御堂の部屋々々を、この掃と箒で、心をこめて掃除をするのだよ。」
と隨機の御教訓。

「いゝか、これが掃と云ふもの、ソレこれが箒だ。云つて御覽「はたき」「はうき」……」
口をモグ／＼させて居つても「はたき」と「はうき」の名が覺えられんとは、よく／＼情けない人。ソレが一年二年三年四年と、とう／＼六年かゝつて、隣りの「半ちゃん」もう義務教育を終つて

中學に行くやうになつても覺え切らず、相も變らず掃を片手に箒をもつて部屋掃除。

曉の風、おもむろに祇園精舎をふき渡り、東天遙かにあけの明星瞬くあした、七堂伽藍、夢のやうに朝霧につままれつゝある中を、み佛初め多くのお弟子は既に行化に出でまして、獨り靜かに御堂の中に、例の掃と箒を手にした須利榮特、部屋のすみ／＼一つの塵も残さぬやう丹念こめて掃き清めようと、スツクと立つたが、どうしたことかハタと掃をなけすて座敷の眞中に撞と坐り、腕拱き頸を傾け、やがて兩手を拍いて、

「ウン面白い。わかつたやうだぞ。自分は毎日々々かうして部屋々々を掃除する。そして塵埃をはき出す。が、ホントウの部屋とはこの身體のことだ。身體の煩惱が塵埃ぢやないか。」
一語一句彼は歡喜にたへ切らぬやう、

「さうだ煩惱の塵埃を掃除して、一身の室内を綺麗にする。これが佛法、佛法の修行だ」
感涙に咽べる彼の眼は、今し出でませるみ佛の御跡に輝き、さては兩手を合せて、

「ありがたう御座います。大聖釋迦如來さま。私はおかけでやつとわかりました。どうぞお

喜び下さいます。兄上も心配かけました。亡き御両親も、ともに「お喜び下さいませ。」と嬉しなきに泣きくづをれました。

これより六根すべて明利に、兄と同様の知識の數に列なり、榮特尊者の名も高く法華經の會座には普明如來。末の世ながく修道の鑑とたゞへられてゐます。

九 あゝ、楽しいかな

跋提王は初め同族の阿那律が出家をすゝめた時、いま七年ほど人生の快樂にひたりたいと云つたくらゐでしたが、一たん浮世のきづなをたち、すべての榮えをすてゝ、いよく出家の身となり、ひとり靜かに林中に經行坐臥してゐると、今の境遇が心から嬉しくつて、つい我れ知らず「あゝたのしいなア」と叫ぶのでした。

それが一日に二度も三度も「あゝたのしい〜」と、云ふものですから、他のお弟子は、「あの跋提は國王だったので、むかしの快樂を思ひ出して、獨りでよろこんで居るにちがひない、怪しからん」と、お釋迦様に申上げました。

「跋提にちよいと來るやうに」

お釋迦様はそのお弟子にいひつけられた。

佛 卿はこのごろ毎日「あゝたのしい〜」と云ふさうだがほんとうか。

跋 ハイほんとうで御座います、世尊よ。

佛 なにがさうたのしいか。

跋 ハイ世尊！。私がかつて國王の位にをりました時は、七圍ひの宮城の中に大臣・百官、常に身邊を離れず、象馬・車・歩の四兵あり、晝夜宮廷を衛護して、何一つ恐るゝところなき身でありながら、しかもたま〜へんな異聲を聞いては、曉の夢を破られ、内亂か外敵かと、どれほど心を勞したか知れませぬ。それに引きかへ今は誰も守るものもなく、たゞの一人で

は御座いまするが、頗る安樂で御座います。その當時は、錦繡を身にまとひ、大らふの美味に飽きながら、少しもおいしいと思つたことは御座いませんでした。今はこの垢じみたころものまゝ、一鉢を手に、樹下石上の生活、何だか煩惱の重荷をおろして楚毒の本を抜いたやうな心の安けさ。晝も夜もたのしくて嬉しくつて、そのため、つい思はず「あゝたのしい」と口から出るので御座います……。

語りつゞける王の眼には法悦の涙が輝いて居た。これを聞きこれを知ろしめしたお釋迦さまは、彼のお弟子に仰せられた。

「跋提はもう聖者だ、修行がたのしくつてしかたがないのだ。」(五分律三)

一〇 象の心

世尊あるとき、拘舍彌に遊び、瞿師羅園に在られた時、その多くの僧侶は、いつも相争ひ、始終不和で仕方がなかつた。

「汝等、諍ふな。もし諍を以て諍を止めようとしても畢竟諍はやまぬ。たゞ忍の一字のみ、よく諍をやめらるものぞ」

斯やうに種々教誡なされても、たうていやさないゆゑ、世尊も遂に遠く去つて獨り娑羅樓羅村にのが行かれた。

この村に婆咎比丘と名ける修道者あり。晝夜眠らず一心に精進して菩提を求めてゐたが今計らずも世尊の尊影を拜して歡悦自らたへず、直にお迎へして、かひなくしくも衣鉢を探り、床をしき、水を汲み、つゝしみてみ足を洗ひ奉つた。

悠然、設けの坐につかれた世尊は、この比丘のために心より説法教化し、それより轉じて護持林に入り、一樹の下に尼師檀をしき、跏趺して座しつゝ、今さらに吐息をつかれるのであつた。

「わしは、已にあの拘舍彌の多くの僧侶等から脱れて来た。彼等はしばらく諍うて、互に伏し互に憎み、互に瞋る。今はもうあの方角を念ふさへたへられない。」

つくづく哀れみ居たまふ所へ一匹の大衆、悠々と他の象の群から離れて、獨りこゝに遊行し來り、恰も護持林の中に入り、蒼鬱たる娑羅樹の下に倚つて立つた。

この時、世尊は、他心智とて、他のものゝ心をしろしめす廣大なる智慧の光にかの象の心を照し給ふ。

俺（象自らを云ふ）は、やうやく彼の群象の中を脱れて来た。彼の群象等は、いつも俺より前に歩いて、美しい草を踏みじり、清らかな清水をかき濁すので、やむなくその草を喰ひその水を呑んだ。今は已に、彼等と離れて、初めて新しい草を喰ひ清らかな水が飲めると斯う思つて居よう。

彼は世間の象、わしは出世間の象、この象と彼の象と、心と心と相等しい……と相見て深く喜ばれたと傳へる。（中阿含）

人々は、やゝもすれば吾が日蓮聖人を以て折伏逆化・強義奮闘、つねに右手に立正安國論を振りかざし（然り、振りかざし）、左手に念珠を掲げてがく／＼の論を唱へ、宛として回教祖の風貌を想像しようとする。これも或はその一面觀であらう。されど斷じて聖人の眞骨頭ではない。

なぜなら、世尊すでに聖人の本地を開示し、その性格を左の如く仰せられてゐる。

このもろ／＼の善男子（上行菩薩）等は、衆にありて多く所説あることを樂はず、つねに靜かなるところを樂ひ、勤行精進して未だ曾て休息せず。（法華經涌出品）

その偈頌にも

つねに頭陀（修道して煩惱の垢を拭ひ去ること。淘汰・抖擻・修治等と譯する）の事を行じて靜かなる處を志樂し、大衆の憤鬧（かしましきこと）をすて、所説多きことを樂はず。（同上）

「大衆の憤鬧をすてる」「靜かなるところを樂ふ」とある。

彌勒菩薩また

このもろくの(上行等の)菩薩等は人衆に在ることを樂はず、常に好みて禪定にあり。(同上)と讃歎した。

されば生年三十二歳より、ことし五十有三歳にいたる二十餘年の法華傳弘の跡を收めて、一たび甲州身延の谷にのがれた聖人は、いかに本然の性に還つて内觀靜思のその日を憧れ戀はせ給うたであらう。

聖人は、この時よりすべて世のわづらひより脱れて、しづかに庵室の中に小法師とたゞ二人、ある時は峨々たる深山に分け入りて薪を拾ひ、ある時は蕩々たる流水に袂をしほり、晝はひねもす一乘妙典を讀誦し、夜はよもすがら觀念觀法の床の上に但見妙事の夢圓かならんを樂はれたであらう。

されど桃李の言はざれどもそのもおのづから徑を爲し、聖人の道風徳香に集ひ來る弟子檀那に、いつもあの小やかな三間四面の庵室にも、人なきときも四十人、あるときは六十人も集つたとある。その上、そのものゝ兄だ弟だと、たより來るものゝ可愛さに、先づ先づとおく

はおかれたものゝ

心にはしづかに庵室結びて小法師と我が身とばかり、御經よみまらせんところ存じて候に、かゝる煩はしきこと候はず。又年あけ候はば、いづくへも、にけんと存じ候ぞ。かゝる煩はしきこと候はず。又々申すべく候。(續遺一八二四頁)

との御述懐は「心から」の仰せであらう。

彼の元政上人は「秋夜寓懷」(集三〇六頁)して

空山、夜寂として知音罕れなり

高く孤峯に立ちて、獨り自ら吟ず

特地の風光、人知らず

好し吾れ月に向つて吾が心を説かん。

と歌はれた。

後世、元政上人のこの境地を以て、これ獨覺の人なり二乗の徒なりと云ふものあらば、それ

は餘りに宗教最高の境地を以て、市井雜音騷音の中に没し去らんとする無謀の擧だ。
 山林樹下と云はず、一切時一切處に於てひとり群象を離れて、自ら大象の心を養ひ、併せて他の大象の心を照し見ることは、神(絕對者—久遠本佛)が、人間に與へられた最大の恩寵である。

—完—

昭和三年六月十五日印刷
 昭和三年六月二十日發行

欣求のこゝろ 奥附

定價金壹圓

著者 西村 慈 珖

發行兼印刷者 井上 治 作
 京都市上京區東洞院通三條上ル

印刷所 平樂寺印刷部
 京都市上京區東洞院通三條上ル

不許
 複製

發行所

京都市東洞院通三條上ル
 振替大阪一三〇六五番

平樂寺書店

電話本局(2)四三一三番

自我偈法華經の神髓

三六版 函入
背布裝 金文字
正價 金八壹圓
郵税 金八圓

法華經が、一切經の結論であつて、諸經中王の大王經である事は、全く「如來壽量品」の一品があるからである。そして、この一品を詮じつめ、説き約めて、歌頌的の偈文にしたのが、いはゆる「自我偈」である。だからこの「自我偈」さへ讀むなら、一切經は「影」の形に隨ふやうだ」と言はれる。

本書は。初めに「自我偈」の經文を和譯し。次に「難解の字義を示し更らに」——經文を意譯して。最後に「講話に移り。特に専門家のため經首に科文を」も加へた。

懇切にして叮嚀、俗話あり譬喩あり、事實談あり。それこそほんとうに「お経はわからぬもの」と云ふ從來の非難を全然一掃し盡した著者一流の講話ぶりに至つては、たしかにお經の解釋者としてのレコードである。前半「壽量の要義」に於て一代佛敎の歸結を論じ、後半「自我偈大旨」の一編、正しく經の微旨を闡明す。切に諸君子の熱讀を祈る。

人生 妙喻 今日の笑話

三六版 美本
正價 金參拾五錢
郵税 金四錢

百喩經の現代意譯にして、七十有三の妙喩を掲げて人生に痛切なる警句を與ふと共に、刻下最高の修養書として大方の愛讀を祈る。

妙宗布教文庫

布教院講師 林鳳宣師説教

第一編 修養講話

三六版 美本
紙數 百五〇頁
正價 金五拾錢
郵税 金四錢

現代人心の趣く處、凡ての社會を通じて漸く宗教的修養の必要を感ずるに至り、道を求むるの士、日人之道を益々多く布教界の前途これより將に多事ならんことを唯だ感むらくは優良なる布教師は常に其人に乏しくして到底限りなき求道者の需に應ずる能はざる事即ち是なり、是に於てか此急需に應ずるの策として教界の諸名士を煩はして其高説を筆受し、之を編纂して「妙宗布教文庫」と題し弘く一般の求道者に流布せんことを期す。

文學士 小林一郎先生講演

第二編 現代と日蓮聖人教義

三六版 美本
紙數 百八〇頁
正價 金五拾錢
郵税 金四錢

今や世界を通じて大戰後の時に際し國際的生存競争益々激しからんとす、吾人は如何なる覺悟を以て此の激浪大波を奮闘すべきか須からく大なる自覺と大なる信仰を要す、日蓮聖人の教義が如何に現代に適切なるか本書は通俗明晰に解決せし先生が講説なり。

巡回布教師 戸田聰察師説教

第三編 法華氣質

三六版 美本
紙數 百八〇頁
正價 金五拾錢
郵税 金四錢

著者は宗門青年布教家中縁に見るの雄辯家にして又思想家、然も熱烈なる信仰の人、法華氣質十座の既教は師が多年蘊蓄の一部を發表せられたるものにして、深遠なる本化の人生觀社會觀を最も平易に且つ趣味溢るゝ口調にて演述せられたるものなれば全く日蓮門下の寛道徳書として廣く江湖に推賞するに足る。

妙宗布教文庫

巡回布教師 戸田聰察師講演

第四編 徹底せる愛國心

三六版 頗美本
紙數百八十頁
定價金五拾錢
送料金四錢

本編は説教に講演に行くところとして可ならざるはなく、兩刀使ひの勇將たるの定評ある著書が最近京都法華會八幡製鐵所及地方青年會等に於ける獅子吼を収録したるものにして、其の筆記の全部は著者の校閲を経たるもの眞に徹底せる主張は現代日蓮主義者の好伴侶にして又國民必讀の警告狀なり。

前管長 旭日苗師説教

第五編 日蓮四大法難説教

三六版 頗美本
全一册紙數百八〇頁
正價金五拾錢
郵税金四錢

本書は近世布教界の泰斗前日蓮宗管長旭日苗上人が晩年東京布教界の爲獅子吼せられたる模範説教なり、納むる處宗祖大聖人の四ヶの大難、輕妙なる譬喩因縁を加えて師一流の圓熟せる辯辯は、全卷に活躍して宗祖の偉徳を發揚して餘蘊なし、布教家は以て布教の師友とすべく、信徒は一讀祖徳鑽仰の良伴俱たるべし。

日本教報主事 田村玄詳氏著

第六編 人生と信仰

三六版 頗美本
紙數二百二十頁
正價金五拾錢
郵税金四錢

人間一日に三度の食物がなくてはならぬやうに、人生に宗教の信仰は缺くべからざる主要素である。就中健全なる宗教の信仰を要する。日蓮主義通俗講壇の權威たる田村氏が日蓮主義から複雑なる人生、悩みある人生に透徹せる解決を同情深き慰安を費らしたものが本書である。本書に盛る所は一、蓮主義の安定、二、人生の眞意、三、佛を信するの道、四、日蓮聖人の教訓と其感化、五、修養と日蓮主義、六、現代日本の急務等である。説述平易にして頗る趣味ある講話體。

妙宗布教文庫

前管長 旭日苗師説教

第七編 安心法談十講

三六版 頗美本
全一册紙數百八十頁
正價金五拾錢
郵税金四錢

信仰の目的は安心立命にあり、本書安心立命を題する法談五席「信仰」「感應」等五席合せて十講現代求道者の切望せる處師獨特の雄辯にて縱横自在に説いて盡さざるなし、附録の講演三題又金玉の文字を以て滿つ。

東洋大學教授 田邊善知先生著

第八編 日蓮聖人の主張

三六版 頗美本
全一册紙數二百二十頁
正價金五拾錢
郵税金四錢

本編は宗學の造詣と弘通の法將とを兼備することの定評ある田邊善知先生の講演手記中より大中小數編を選び之を布教文庫第八編として發行するものなり。眞日蓮の主張に觸れんとするもの亦之を國民思想の指導に活用せんとするもの速に一本を座右に備へられんことを薦む。

僧正 西村慈珣師著

第九編 信の世界

三六版 頗美本
全一册紙數百八十頁
正價金五拾錢
郵税金四錢

本書篇を分つ三、第一篇「楞嚴羅が子日蓮」に於ては、専ら人間としての聖人を闡明し、第二篇「女性の尊嚴」は、近代女性觀の歸趣を提示し、第三篇「舊人の道」の各章眞摯なる求道者の態度を要請す。各篇各々七、合して二十一章、悉くこれ現代人の求めんとし聞かんとする好題目なり。

京都市東區洞院西 平樂寺書店 振替口座番 六一〇五

京都市東區洞院上 平樂寺書店 振替口座番 六一〇五

法華經普及會校訂 菊版半裁五百頁

眞法華經并開結 振かな付

上製布表裝 正價壹圓八拾錢
 天金押 送料各八錢
 特製總皮製 正價貳圓五拾錢
 三方金

法華經を唱誦するこ
 とは其の音便を記
 憶するすら却々至難
 の事である。それを
 誰にも読み易く、讀
 誦し易からしむべく
 嚴密なる校訂を加へ
 正確なる振假名を附
 したのが本書である
 本文振假名共新鑄の
 活字を用ひ印刷の鮮
 明なる又本書の誇り
 たり。

法華經普及會編輯

凡例の一

一、諸經典中、その讀誦せらるゝ事の多き、蓋し法華經の右に出づ
 る者はあらず。之本經の印行殊に盛なる所以なりとす。
 一、古來本經讀誦の稽古は、一年二年、乃至五年の歲月を要したる
 者なり。然るに今や印刷の業盛にして假名附本の刊行漸く多きを
 加へ、初心者は之に頼りて容易に習得するに至れり。
 一、假名附本によりて習得するは、事甚だ至便なる代りに、誤讀亦
 た尠からず、之れ既刊假名附本の注意至らざるの致す所か。
 一、本會茲に見る所あり。現時最も流布の廣き頂妙寺版に、假名附
 本の權威たる日相本の假字遺に訂正を加へて之に附し以て誤讀な
 きを期したり。
 (本文四號活字、振かな七號活字、印刷鮮明)

訓譯	法華經并開結	正價上製壹圓貳拾錢	送料各八錢
縮刷	法華經并開結	正價上製壹圓貳拾錢	送料各八錢
		特製貳圓	

終

